

性的マイノリティのパートナーからの暴力（DV）被害と相談行動に関する調査 －第一次集計分析－

釜野さおり・北仲千里・藤原直子

「LGBTs・IPV 研究プロジェクト」メンバー：

釜野さおり(国立社会保障・人口問題研究所)北仲千里(広島大学)藤原直子(相山女学園大学)
立石結夏(東京第一弁護士会)鈴木朋絵(山口県弁護士会)須田布美子(札幌弁護士会)

中川重徳(東京弁護士会)水谷陽子(東京弁護士会)森あい(熊本県弁護士会)

三輪晃義(大阪弁護士会)加藤丈晴(札幌弁護士会)大畑泰次郎(大阪弁護士会)

共同代表：北仲千里・立石結夏 Email: lgbtipv@ybb.ne.jp

1. 問題意識

- ドメスティック・バイオレンス(DV、または IPV(Intimate Partner Violence, 親密なパートナー間の暴力)は、重大な人権問題。DV は婚姻や親密な関係をベースとする、生活の場での人権侵害であり、加害者が被害者を支配、コントロールしながら行われる虐待である。
- DV/IPV 概念自体は、当事者の性別にかかわらずに該当するが、問題の背景には社会のジェンダー構造があるため、圧倒的に女性が被害者になる「女性に対する暴力 Violence against women」「ジェンダーに基づく暴力 Gender-based violence」問題として取り上げられてきた。
- 性的マイノリティのパートナー間の DV/IPV についてはどのような現状であるのか。性的マイノリティの関係性における被害、相談対応、支援の在り方は、これまでのシスジェンダー異性愛女性を被害者として想定したものでよいのかどうか。

【現状】

- 被害があるが、あまり実態がわかっていない。相談対応の現場にもトランスジェンダー女性の相談が来ていることが少しはうかがえる(北仲, 2010)。
- セクシュアル・マイノリティの人々に対するいじめや暴力も「ジェンダーに基づく暴力」の一側面としてみていくことができる可能性
- マイノリティゆえに、「DV」と捉えることが難しかったり、相談しにくい、DV 相談支援者からの理解も得られにくい可能性

→ 「マイノリティ・ストレス」(Donovan and Barnes, 2018)、「ゲイの性暴力被害」(大島岳)

【相談や対応】

- 現状の「女性に対する暴力」をベースにした相談・防止施策で、対応できるのか。特に日本の場合は、そもそも売春防止法にもとづいた「婦人相談所」を土台とした DV 相談・対応策そのものが大変不十分で、ますます対応が困難と思われる。
- DV 防止法改正によって、婚姻カップル以外にも DV 法の保護命令は出されることになったが、同性カップルにもちゃんと発令されるのか？
- 2017 年の内閣府の調査では初めて同性間の性暴力被害についても調査対象にされた。回答者の 1.5%が性行為を強制された経験があり(女性は 7.8%)、その内 17.4%が「同性から」被害にあったものという結果が得られた。

2. DV 被害の理論化や調査について

(1) 異性愛マジョリティの DV 調査・研究

【調査の設問に関して】

- ・ ただ単に「殴られたことがあるか」というようなアンケート調査を実施して、その経験率を「DV 被害の経験率」とすることが批判され、より精緻な分析枠組が提起されてきている。
- ・ 渋谷(2003)によると、調査での測定方法についても様々な議論がされてきており(これまでは Straus らの CTS 尺度が多く使われてきた)、身体的暴力については「首を絞める」を加えたことで発生率に変化が出ていることや、文脈や加害者の動機・意図・被害者の解釈等を考慮すべきだという議論がなされてきたという(渋谷 2003)(Donovan and Barnes,2018)。
- ・ 多くの国で比較のために同一調査票で実施されている WHO の調査があり、ほぼ同じ DV 定義・質問紙での比較をすることを容易にしている。
- ・ 日本では、(異性愛・シスジェンダー)女性の DV 被害の調査は、最初は、研究会による調査がなされ、その後、国や自治体によるアンケート調査が繰り返されている。しかし、このような調査方法(質問内容も含め)が本当によいのかは疑問が残る。

ちなみに、最新の内閣府 H29 年度調査の結果では、

内閣府「男女間における暴力に関する調査(平成29年度調査)」

調査対象:全国20歳以上の男女

	配偶者からDV(%) 女性(n=1366)		男性(n=1119)	
	1,2度あった	何度もあった	1,2度あった	何度もあった
身体的暴行	14.5	5.3	12.8	4.8
心理的攻撃	9	7.8	6.5	1.7
経済的圧迫	4.8	5.2	1.8	3.5
性的強要	5.9	3.8	1.3	1.1
計	17.5%	13.8%	15.1%	4.8%

「交際相手がいた(いる)」という人(1,833人)へのサブクエスチョン(%)

	交際相手からDV 女性(n=969)		男性(n=864)	
	「あった」	全回答者中	「あった」	全回答者中
身体的暴行	10.7	(7.6)	6.3	(4.8)
心理的攻撃	13.6	(9.7)	7.3	(5.6)
経済的圧迫	6.3	(4.5)	2.6	(2.0)
性的強要	9.4	(6.7)	2.1	(1.6)
計	21.4		11.5	

相手の性別(交際相手からこれまでに被害を受けたことがある人)(%)

	計	女	男
異性	97.7	98.1	97.0
同性	0.7	0.5	1.0

ストーカーの被害「あった」

女	男
10.9%	4.5%

(2) DV 概念そのものの精緻化の必要性

- Johnson は、関係性のダイナミクスを理解しないと誤った介入を行ってしまうとして、DV を三つのタイプ **Situational couple violence**(対立が激化しているがまだ支配関係にはない)、**Intimate terrorism**(相手を一方的に支配する関係性)、**Violent resistance**(主に身体的な暴力による抵抗、報復)に分類し、そのうち **Intimate terrorism**こそが**問題とされるべき状態**であり、この三つを混同せずに調査でとらえることが重要であるという(Johnson, 2008)。
- 性的マイノリティ対象とした正確な「被害率」を測るような量的調査の困難性
次項③に見るように、無作為抽出調査のような、代表性のある調査を実施することは難しく、海外の調査も、量的調査で「何%」という値を確定して比較していくことについては苦勞している。(イベントでの配布、団体を通しての依頼、インターネット、雪だるま式の紹介)。同性カップルよりも、バイセクシュアルやトランスジェンダーを対象とした調査はもっと少ない。

3, 海外の先行研究

- Lisa K. Waldner-Haugrud ほか(1997)によると、これまでの調査は、サンプルの問題、時間枠(「現在」か「今までの人生で」か)の設定の違い、何を DV と捉えるかの定義の違い、サンプル数の少なさ等から、調査を比較することにはいろいろ困難がある、としつつも、(アメリカ・アイオワ州中心の)283 サンプル中、レズビアン 47.5%、ゲイ 29.7%が同性のパートナーからの被害に遭っている。さらに、レズビアン 38%は加害を行い、これはゲイ 21.8%よりも多い。ただ、深刻度が高いケースでは、レズビアンとゲイのカップルの間に有意な差がないとしている。
(Waldner-Haugrud et al.,1997)

*しかしこれは、改訂版 CTS 尺度 (Conflict Tactics Scales by Straus, Gelles, & Steinmetz, 1980) にもとづいたもの、サンプルも全員白人、高学歴、ミドルクラスに偏りがある。

- Barns & Donovan(2018) によると、最近のアメリカの 14 の調査をまとめると、レズビアンでは身体的暴力 58%・精神的暴力 64.5%・性暴力 56.8% (Badenes-Ribera et al., 2015)、ゲイの被害率の 28 のアメリカの調査の整理では、かなりばらつきがあるが、精神的暴力(5.4-73.2%)、身体的暴力(11.8-45.1%)、性暴力では(5-30.7%) (Finneran and Stephenson, 2012)
- Johnson のいうように、真の DV(intimate terrorism)でない経験(一度きりの出来事や、たまたま起きた、コントロール的ではない互酬的な暴力(強い不安やこだわり)、自衛のための暴力)も DV としてカウントしてしまうような調査方法になってしまっている。

＝文脈・動機・ダイナミクスやその影響をつかむことに失敗している ←支援・介入に重要な視点

→ 文脈や LGBT の状況をふまえた調査方法の採用と、インタビュー調査の重要性

COHSAR アプローチ (Comparing Heterosexual and Same Sex Abuse Research) was developed for the first UK study comparing love and violence in same sex and heterosexual relationships (Donovan and Hester, 2014; McCarry, Hester and Donovan, 2008)

The Coral Project (n=872) 英国 ⇨ 10.6%の回答者が Johnson の「intimate terrorism」の経験

そこで今回の調査では、「何%」という被害率の結論を出すことを目指すのではなく、多くのサンプルを集め、実際に性的マイノリティのパートナー間に DV 被害があること、その状況を知ることを目指して実施した。(今後インタビュー調査を予定)。調査票項目については、身体的・性的・精神的 DV の分類は踏襲し、その内容は WHO の調査票と海外の調査において指摘されている性的マイノリティのパートナー間に起きそうな具体的な行為を考慮して作成し、ストーキング被害も加えた。

<参考文献>

Lisa K. Waldner-Haugrud, Linda Linda Vaden Gratch and Brian Magruder, *Victimization and Perpetration Rates of Violence in Gay and Lesbian Relationships: Gender Issues Explored in Violence and Victims*, Vol.12, No.2,1997

渋谷敦司「補論 ドメスティック・バイオレンス調査の課題」 庄司洋子・波田あい子・原ひろ子編著『ドメスティック・バイオレンス日本・韓国比較研究』明石書店 2003年

吉浜 美恵子, 秋山 弘子, 戒能 民江, ゆのまえ 知子, 林 文, 釜野 さおり『女性の健康とドメスティック・バイオレンス—WHO 国際調査/日本調査結果報告書』新水社 2007年

北仲千里 「あらゆる性別を包括するドメスティック・バイオレンス政策への課題」[フィールド・レポート]『ジェンダー& セクシュアリティ』国際基督教大学ジェンダー研究センター (5) 95-108 2010年

Michael P. Johnson, *A Typology of Domestic Violence: Intimate Terrorism, Violent Resistance, and Situational Couple Violence*, 2008

Catherine Donovan, Rebecca Barnes and Catherine Nixon,
University of Sunderland and University of Leicester,
The Coral Project: Exploring Abusive Behaviours in Lesbian, Gay, Bisexual and/or Transgender Relationships, Interim Report, September 2014

Catherine Donovan and Rebecca Barnes, *Domestic violence and abuse in lesbian, gay, bisexual and/or transgender (LGBT) relationships*, Sexualities 1-10, 2016

Rebecca Barnes and Catherine Donovan, *5. Domestic Violence in lesbian, gay, bisexual and/or transgender relations*, in *The Routledge Handbook of Gender and Violence*, Edited by Nancy Rombard, 2018